

7. フィリピン (Philippine)

鈴木 絵美留

＜前号（209号）から続き＞

フィリピンは面積が日本の約8割程ですが7,641もの島々があるそうです。たくさんの島から成り立っていることは知っていましたがすごい数ですね。公用語はフィリピン語（タガログ語）と英語なので、訪れた時は英語が通じる方がほとんどでしたが、郊外に行った時に少し英語が通じにくいなと感じることもありました。厳密には180言語以上あるそうです。

日本からフィリピンへは飛行機で大体4時間半から5時間ほどで到着します。日本との時差はマイナス1時間、日本が12時ならフィリピンは11時です。前号で紹介したマリキナ市はマニラ首都圏の東部にあり、マニラから車で50分程で到着します。

フィリピンの交通事情はもちろん日本と全く違いますし、いざ街中に来てみて、私の運転技術ではこのすごい渋滞の中を移動するのはとっても難しい（！）と判断した結果、タクシーやガイドを頼むのはなんだかんだと高額でしたので、私は車の配車アプリを利用し



（写真1：著者撮影）

車と車の間にはバイクがぎっしり。横から間髪入れずに合流する車たちに、車中でドキドキしていました。

て、空港からホテルなど、すべてのフィリピン滞在中の移動を行っていました。

自分がいる場所をGPSで示してくれるので、ショッピングセンターのたくさんある入り口のどこにいますとタクシーを呼ぶのであれば伝えないといけないところ、配車アプリであれば、どこで待っていても、自分の目の前まで迎えに来てくれます。海外で土地勘もなく言葉も通じにくいところで、電話で自分の正しい場所を伝えるという行動がないということは、こんなにも快適かと痛感しました。

ただし海外での配車アプリの利用は大変便利である反面、危険もあるのです。都市部から郊外に行く時はまだ良いのですが、郊外から都心部へ戻るときにドライバーが見つからず、何もない場所で途方にくらってしまう恐れもあります。言葉もあまり通じず、地元の人しかいないようなローカルな場所では大変危険な目に遭う恐れもありますので、配車アプリを利用される際は十分に気をつけてください。公共の乗り物でマニラからマリキナへLRTという電車やバスを乗り継いで行くことは可能なようです。私は利用しなかったのですが、公共交通機関を利用してマリキナ方面へ行かれる際は事前に調べて行かれることをお勧めいたします。

また、マリキナ靴博物館は公式のホームページがなく、Facebookページはあるのですが、ここ数年更新されておらず、マリキナ市の公式ページにも詳細がない状況です。旅行口コミサイトやGoogleマップに開館時間や入館料などの記載があるので、そちらの最新の口コミなどを確認してから訪れた方が良いでしょう。ちなみに私が訪れた時は50フィリピン



(写真2：著者撮影)

マリキナの街へ入るところで大きなハイヒールのオブジェが出迎えてくれます。車の中から撮影したのでよく見えないかもしれませんが、陸橋の下、大きなMの上に赤いヒールが乗っています。

ペソ程でした。当時のレートで確か100円くらいなのかと思った記憶があります。

マリキナは古くから、フィリピンの靴産業を支え、栄えてきた土地です。革靴メーカーや靴職人など、市民の半数近くが何らかの形で靴産業に従事していると言われています。スペイン統治時代の1887年、ドン・ラウレアノ・ゲバラ氏（通称カピタン・モイ氏）がマニラから買ってきた外国製の靴を分解して、自分たちで靴の作り方を研究し学んだのが靴産業の始まりと言われています。靴の製造が新たな産業になると考え、助手たちとともに、マリキナの若者たちに靴の作り方を教え、主にマニラを市場とする靴産業を育て、サンダルから革靴まで様々なジャンルの履物を生産し、1950年代には靴の首都と呼ばれるようになりました。その後、中国製の安価な靴が流入してきたことにより衰退してしまった時期もありますが、最近は靴産業も新しい世代になり、インターネットやSNSの普及により復活してきている様子です。そういった部分も含めて、前号で紹介した映画たちが作られてきたのだと思います。

縁あって家族経営されている靴製造会社の女性社長とお会いすることできて、周辺を車



(写真3：著者撮影)

革の専門店では、たくさん革が販売されていました。「ここでは革を切らないで」と看板が出ています。店内とっても綺麗でした。

で案内していただきました。革や靴製造に必要な資材の販売店にも行くことができ、マリキナの第一印象は、「東京の浅草みたいな」と強く思いました。

もし、もっと深くマリキナの靴産業についてご興味がある方がいらっしゃいましたら、12年前の情報にはなりますが、東南アジア研究50巻1号(2012年7月)に「海外製品流入とフィリピンの地場製造業—製靴業の事例から—」という論文が掲載されています。コロナ禍を経て世界の情勢は一変しているので、現在のフィリピンの靴産業についての状況は大きく変わっているものと思いますが、参考までにご一読ください。＜次号へ続く＞



(写真4：著者撮影)

靴作りに必要な材料パーツを扱っているお店。可愛いヒールパーツなどもあり、1個からでも販売してくれました。